

音楽文化を学ぶ

著者	小西 潤子
雑誌名	技を媒介とした学びに熱中する子どもの育成プログラム ; 2012
ページ	109-112
発行年	2012-03-31
出版者	静岡大学教育学部
URL	http://hdl.handle.net/10297/7215

音楽文化を学ぶ

音楽教育講座 小西潤子

1. 音楽文化をとらえる

グローバル化、知識基盤社会化に対応して平成 24(2012)年度から移行する新しい学習指導要領の音楽科の記述では、「音楽文化」という語が全面的に出されている。戦後からの学習指導要領を振り返ると、我が国や諸外国の民謡や民族音楽にも言及されている。しかし、そこで想定されている諸外国は東ヨーロッパであったり、実際教材として授業で取り上げるのは西洋音楽に偏ってきたりした傾向がある(降矢 2009)。しかも、これら非西洋の音楽を扱う場合でも、西洋の音楽理論をあてはめて音階構造やリズム、ハーモニーを分析的にとらえるにとどまりがちであった。改訂版に準拠した教科書で、アジアを始め世界の諸民族の音楽を文化のなかで捉える観点が打ち出されているのは、画期的である。「諸民族の音楽文化に接近するための準拠枠」(山口 2004, 6)としての民族音楽学の考え方が、ようやく教育現場において本格的に位置づけられることになったからである。

実は、音楽文化は教育学部にとってはなじみのある言葉である。というのも、いわゆるゼロ免課程である芸術文化課程のうち音楽に関する専攻は、当初から「音楽文化専攻」と命名されてきたからである。とはいえ、この専攻が設置時点において、諸民族の音楽文化を主たる教育研究対象としていたわけではないのは、実技系専門科目がピアノや声楽などといった西洋音楽に特化していたことから明らかである。ただ、「日本音楽」「民族音楽」などが初期のカリキュラムに組み入れられていたし、「音楽文化史」という科目名に表れるように、西洋音楽を専門的に学ぶにしても歴史や文化という観点を踏まえることが想定された。この事情は 2011 年現在でも大きくは変わらないが、筆者が赴任した 2000 年度後期からは筆者自身の担当科目において、専門性を活かしつつも刻々と変化する学生と学校現場のニーズに対応する試みを行ってきた。具体的な科目としては、「音楽学概論」(1 年)、「音楽文化史」(2 年)、「文化芸術事業実習」「民族音楽学」(3 年)といった専攻全体に開かれた科目と、音楽学の専攻生のためのいわゆるゼミ科目「音楽文化研究」(1~4 年)などがあげられる。

これらはいずれも、半期で完結する科目である。短期間で内容を深めて充実させることと、受講生の学問的な視野を広げることを両立するのは、大変困難である。試行錯誤の末、前者については受講生の主体性を引き出す工夫を行うこと、後者については学年を追うかたちで積み上げることによって、在学期間全体を通して音楽文化の学びの目標によりやく近づけるようになった。たとえば、「音楽学概論」の授業では、受講生が自ら興味をもっている音楽を紹介することを手がかりに、音楽学の考え方や方法論へと発展させる道筋を受講生とともに考えていく。また、「音楽文化史」の授業では、『音楽文化のすすめ』(小西ほか編 2008)を指定教科書として、各自が読み込んだ内容やさらにそれを発展させたテー

マを持ち寄り、受講生とともに音楽文化史を再構築していく。こうした受講生が自ら学び、それを他者に伝えることを中心とする授業のあり方は、従来から大学で行われてきた講義形式とは全く異なる。必ずしも毎回達成感が得られるとは限らないが、実践や場数によって音楽文化を学び、伝える体験が蓄積されていく。授業での実践を手始めとし、多様な状況において学び伝える技は、学校教育現場はもちろん広く社会人に求められる。本年度の「技プロ」では、授業の延長としてあるいはその発展型として、学生たちが学び伝えるための機会を提供してきた。本稿でまずとりあげるのは、2011年7月30日の学部説明会における学生による模擬授業の例である。

2. 学びを広める

2011年度の学部説明会では、初めての試みとして、「音楽文化史」受講生のうち2名の代表者による学習成果発表を取り入れたⁱ。それぞれが授業でのプレゼンテーション用に作成したパワーポイントのスライドと音源資料を使って、受験生やその保護者に音楽文化史として自らが学んだ内容を披露したのである。ねらいは、受験生らに「音楽文化」の考え方に興味をもってもらうこと、学生の主体的な取り組みや学びの内容を知ってもらうこと、発表する学生には学習内容をうまく伝える技を磨く機会とすることであった。代表者は、1人を西洋音楽系、もう1人を非西洋音楽系のテーマを扱った者とし、テーマの独創性や受験生へのわかりやすさなどを基準に選んだ。

まず、藤田翠（音楽文化専攻2年）が「モダンピアノでのバロック音楽の解釈と奏法の比較」と題したプレゼンテーションを行った。ピアノの変化の歴史、バロック音楽の説明、CDを用いての演奏者による同曲の演奏解釈の比較などをうまくまとめ、高校生にもわかりやすい説明を行った。ピアノを専門としている学生が、文化と歴史を理解して演奏に臨もうとしていることが伝わったはずである。次に、永瀧千燈（音楽教育専修2年）が「遠州大念仏について」の紹介を行った。これは、自らの出身地の芸能について資料収集を行い、経験を交えながら具体的な内容を提示したものである。近隣地域の高校生らも多く参加していた様子であったので、身近な祭礼が勉強の対象となることを理解してもらえたと思う。実際に学生が学んでいる内容を通じて、高校生らに音楽文化の対象や方法に関心を持ってもらえれば、学部説明会は受験生のためにとどまらず、学問普及活動の一環となる。

ほかにも、廊下の壁を利用して、音楽文化専攻1年対象の「新入生セミナー」の一環として学内の音環境調査をまとめた「サウンドマップ」の展示も行った。新入生セミナーは、学内の環境と施設利用、生活についてのガイダンスの延長に位置づけられている科目である。筆者が担当している音楽文化専攻の学生には、1コマ分を学内探索にあてて、ポイントとなる地点で音環境に耳を傾けて、その印象をスケッチする課題を出している。それをもとに、各自がA3用紙横1枚にまとめたものを合わせて展示した。学生はそれぞれの表現に工夫を凝らしている。たとえば、「楽器の音の広がりを赤で表した。木々のさわさわした感じを水色でさわやかな感じにした…」と色で音のイメージに変化をつけたり、「サッカー場

の歓声が遠くにいてもきこえたので、少し大きめにかいた…」と音の聞こえ方を大ききで示したり、図形によって表現したりと、同じ空間で聞く音でも人によってさまざまな受けとめ方があることが一目瞭然になった。

音環境に関心をもつことは、実は学校教育における創作活動でも求められている。すなわち、小学校学習指導要領第1学年及び第2学年の音楽づくりの活動に「声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること」とある。「サウンドマップ」は模造紙に張り付けただけのもので、展示物自体のクオリティは高いとはいえないが、それぞれが感じ取った音の世界を表現し他者に示すことが、将来の学校現場での授業づくりに役立つことがあるかも知れない。

3. 大学間で交流する

教員定員数や非常勤講師の削減により、現在ではほとんどの授業を専任教員が担当している。その結果、学生には専門性の高い教育内容を提供したり、異なる専門性からの多角的な分析や解釈を示したりすることが困難になってきた。これを補うために、鍵盤楽器を中心とする西洋音楽文化史を専門とする静岡文化芸術大学・小岩信治准教授と筆者は、2008年からそれぞれの担当科目の1コマ分を使って交流授業を展開してきた。筆者が、静岡文化芸術大学でミクロネシアにおけるフィールドワーク体験や音楽映像資料を紹介するのと引き換えに、小岩准教授にはショパンが使っていた時代のピアノを使った演奏解釈の最前線について講義していただくものである。

これは、双方の学生にとっても刺激となる。過去には、交流授業を受けたことをきっかけに小岩准教授が推薦する薪能に参加した学生もいた。その学生の一人が、本報告書でも取りあげる「Let's 能プロジェクト」にも参加することになった。今回の静岡大学側の受講生からの感想をいくつか紹介すると、まず作曲専修生は「(当時のピアノを知るにより) ショパンがオーケストラの編曲が苦手ではなかったとわかった…今のピアノなら、そのギリギリの小さい音を使った曲を作りたい」と述べた。言い換えると、楽器のもつ限界と音楽表現の可能性を専門分野で追究したいと思ったわけである。ピアノ専修生からは、「スタインウェイはピアノであって、ピアノではない。本当のピアノとは何か」という疑問が出された。これは、当該学生がこれからずっと長い間かけて考えていく課題となる。

また、今年度の交流授業では小岩准教授を中心に静岡文化芸術大学の学生チームがプロジェクトで演奏会の企画運営をしているという情報も入手できた。これに対して、聴講生として参加したピアノ専修3年生は、「(静岡文化芸術大学の学生企画による) スイーツコンサートなどといった室内楽の音楽活動に驚き、嬉しく思った…私も寄り添う音楽を目指している」という感想を述べた。また、「非常にバラエティ豊かな充実した公演内容だが、入場料金の設定やポスター制作など、運営や宣伝方法を知りたい」と質問した学生もいた。

先方の学生からも、筆者によるパラオの歌(特に「恋愛恨み歌」)に関する授業終了後に熱心な質問がいくつも寄せられた。たとえば、「パラオの人々は今の日本に関心を持ってい

るのか。日本の J-POP やロック風の歌を好んで聴いたりしているのか。」 「(ヤップの) 石貨って今でも人を殺すのに使えるのか。」 「身分制度の厳しい場所だと聞いたが、現在の音楽やメディア・情報が流入していくことは、その社会の構造に影響しないのか。」 「狭いという点では島国の日本にも近い。思えば、演歌の内容も、色恋のうらみつまみだったり、マイナスイメージのものが多い。これも文化的繋がりと言えるのか。」 などである。こうした学生からの素朴な質問は、自らの研究課題に直結するので、教員にとっても刺激となる。また、こちらで開講する授業にも参加したいという学生も現れた。学生の授業への取り組みやリアクションを通して、教員同士がお互いの学生の動向を知るよい機会となる。他大学の学生を知ることは、自らの授業改善にもつながるのである。

静岡大学教育学部音楽教育講座と静岡文化芸術大学とでは、教育目標は重なりつつも、ずれがある。たとえば、静岡大学の音楽文化課程では実技を始めとする実践的な音楽への取り組みがあるのに対して、静岡文化芸術大学では音楽マネジメントに主眼がおかれている。お互いを意識し情報交換することによって、それぞれの独自性に磨きをかけることができる。交流授業は恒常的なものではないが、今後も何らかの形で交流を継続したいと考えている。

【参考文献】

- 小西潤子・仲万美子・志村哲編著 2007 『音楽文化学のすすめ』 ナカニシヤ出版。
降矢美彌子 2009 『地球音楽の喜びをあなたへー未来の地球市民となる子どもたちのための多文化音楽教育』 現代図書。
山口修 2004 『応用音楽学と民族音楽学』 放送大学教育振興会。

ⁱ 学部説明会は、当日午前 10 時からと 13 時からの二回、各 1 時間で、内容は音楽文化史各 10 分に加えて、声楽演奏、「大学における学習と生活について」と題する学生 4 人への質疑応答を行った。